

## 論文の和文要旨

論文題目

ダグール語の述部の諸相

氏名

山田 洋平

### 1. 本論文の目的

本論文では、モンゴル語族ダグール語のとくに述部の諸相に注目して文法現象の記述を行った。ダグール語とはモンゴル語族に属する言語の一つで、類型論的には主語・目的語が述部に先行する、修飾語が被修飾語に先行するなど、いわゆるアルタイ型の言語特徴を見せる言語である。ダグール語の述部に注目して記述を行うことで、従来の研究では十分に関心が払われてこなかったダグール語の統語的特徴を明らかにする基盤を構築するのが本論文の目的である。

ダグール語の研究としては恩和巴图による一連の研究があるが、その記述や分析はなお不十分である。本論文では述部に焦点を絞り、動詞の形態を再検討し、動詞述語や名詞類述語が絡み合う述語複合体の様相を記述し、主節・非主節といった節のタイプによる述部の現れを整理した。この点で、従来の個別の語類の形態とその機能からまとめられた文法記述とは異なる性質を持つ。こうした手法をとったことによって、例えば語順などの類似に見られるアルタイ型の言語特徴を共有する言語との対照研究を行う際にも、述語複合体(補助動詞構造、人魚構文、否定、存在文、終助詞などから成る)を対照するモデルとなるであろう。具体的には以下のような事項を検討した。

### 2. 動詞の形態的特徴

動詞は典型的に節の述語を成す語類である。本論文では動詞を動詞語幹(語幹のみで示す場合は、末尾に\_を付して示す)と動詞接辞から成る語類と定義し、多様な動詞接辞を機能からではなく後続しうる要素(終助詞、述語人称、所属人称接辞、格接辞)から分類した。この分類は主節・非主節といった節のタイプを考える上で有益である。他方で、従来の分類の一つである動詞の形動詞形も、述語複合体に関する議論において認める必要がある。ダグール語における生産的な形動詞接辞は未来-gu と完了-sen の2種類である。

この他、ダグール語の動詞にまつわる要素として動詞前辞の様相を概略的にまとめた。動詞前辞は動詞の直前位置に現れる要素で、「破壊」などの様態を表すものである。動詞前辞に動詞派生接辞を付して、自他対立のある「破壊」の意味の動詞のペアを派生することもできるし、ič\_「行く」、hii\_「する」などの動詞と共に用いて「破壊」の意味を表出することもできる。

### 3. 述部の基本構造

本論文では述部を、節を構成する成分の一つで、「項の属性や関係をあらわす」ものであると定義した。複数の項を支配して関係をあらわすという点で、典型的には動詞がこれを担う。2つ以上の動詞が複合的に用いられ、後続する動詞が文法化して補助動詞になる補助動詞構造も盛んに用いられる。他方、名詞類も単独で述語を成すことが可能であり、補助的に存在動詞 *aa\_* などがコピュラとして用いられることがある。名詞類には形容詞的な語や抽象的な意味の語も含まれ、中には動詞述語と組み合わせて、いわゆる人魚構文を成すものもある。このように動詞と動詞による補助動詞構造、名詞類に動詞が後続するコピュラ構造、動詞に名詞類が後続する人魚構文などの表現がダグール語には豊富であり、さらにこれらが複数組み合わせたり、前後にある種の不変数詞類の語などが組み合わせたりして、さらに複雑な構造を成すこともある。本論文ではこれを述語複合体と呼ぶ。

述語複合体を成す頻度の高い表現として否定がある。名詞類述語は、当該述語の後ろに否定を表す語 *bišen* を置いて表す。動詞述語は次のようにいくつかの方式があり、これは大まかに前置否定と後置否定に分けることができる。例は動詞 *oo\_* 「飲む」に揃えて示し、前置否定の要素には下線を、後置否定の要素には二重下線を引いた。

#### 動詞述語の否定

主節の動詞述語 (叙述)	非過去	a.	<u>ul</u>	<u>oo-n</u>	
			NEG	to.drink-NPSTII	「飲まない」
		b.	<u>oo-gu</u>	<u>uwei</u>	
			to.drink	NEG.EXIS	「飲まない」
		c.	<u>oo-gu</u>	<u>udien</u>	
			to.drink-FUT	not.yet	「(まだ) 飲んでいない」
	過去	a.	<u>oo-sen</u>	<u>uwei</u>	
			to.drink-PERF	NEG.EXIS	「飲まなかった」
		b.	<u>es</u>	<u>oo-laa</u>	
			NEG	to.drink-PST=1PL.INCL	「飲まなかった」
主節の動詞述語 (希求)			<u>buu</u>	<u>oo-ø</u>	
			PROH	to.drink-IMP	「飲むな」(禁止)
非主節の動詞述語			<u>ul</u>	<u>oo-goos</u>	
			NEG	to.drink-COND	「飲まないならば」

主節の動詞述語で叙述の場合には、前置否定と後置否定の使い分けが問題になり複雑であるが、主節の動詞述語で希求の場合には一律 *buu* という否定要素を、非主節の場合には多くの場合 *ul* という否定要素を動詞に先行させればよい。叙述の非過去では基本的に前置否定、過去では後置否定(それぞれ a. の例で示したもの)が現れるという分布が見られるが、非過去の b. は形動詞形を要求する人魚構文型の否定表現を取ることで、進

行相を否定のスコープに入れたり、説明の文脈で現れたりする。

存在や所有を表す表現は、動詞述語によっても名詞類述語によっても成される。存在動詞 aa\_ は「住む」「暮らす」とも訳しうるもので、時制や相などが無標の主節においては使われにくい。例えば一時的な存在を表す場合に、進行相を表す補助動詞構造に aa\_ を本動詞として用いた aajaabei などの表現が用いられる。aa\_ の主語は存在物である。名詞類述語で表す場合、存在そのものを表す語 bei「ある」を用いるものと、「～がある」という意味を表す接辞 -tii を存在物に付すという 2 種類の方法がある。存在そのものを表す語 bei は動詞接辞の付されない名詞類の語であり、主語は存在物となり、存在の場所などが新情報として示される。-tii は存在物に付されて新情報として名詞類述語を成すもので、主語は所有者となる。これら存在や所有の否定は、uwei「ない」という語を用いる一択となっている。この場合、存在物も所有者もいずれも主語項として取ることが可能である。

#### 4. 節のタイプと述部

述部は、主節に現れるものと主節以外に現れるものとで様相が異なる。主節において述部は判断のモードや働きかけのモードを表出するような形式を取り、動詞は希求の形を取ったり、末尾に終助詞が現れたりする。終助詞であると従来考えられてきた形式の中には、先行する動詞に形動詞形を要求する名詞類の語が含まれる。機能としては節を名詞的な属性叙述にはめ込むもので、判断のモードを表出する終助詞的な名詞類であり、形式としては人魚構文にあたるものである。推量の意味を表す終助詞は、やはり判断のモードと呼べるものであるが、述語人称よりも前に付される点が特徴的である。述語人称の出現位置は終助詞が持つモダリティ的意味の、対事的・対人的の境目にあると言える。述語人称の後ろには疑問や命令の和らげなどの働きかけのモードを担う終助詞が現れる。同じく述語人称を有するモンゴル語族ブリヤート語や、述語人称らしい要素のある中世モンゴル語では、疑問を表す終助詞的要素よりも後ろに述語人称(らしい)要素が現れる。おそらく述語人称はもともと述語複合体の一番外側(最後)に現れるものであったが、ダグール語においては疑問を表す要素が対人的モダリティを表すものとして終助詞らしさを強め、述語人称よりも後ろに位置するようになったのであろう。

終助詞や述語人称を伴わない動詞接辞は、時制や働きかけの意味を有さない、他の節に依存する非主節を形成する。そこでは RRG の枠組みにより節などの要素の独立性の低さから、主節と段階的な差を有する非主節の述部の形式についてまとめた。ダグール語では連位接続を担う動詞接辞が豊富で、かつ所属人称を付すことで同主語・異主語を表現するものもある。形動詞形の動詞述語は典型的には従位接続を担うが、これが連位接続を担うケースもある。等位接続は単なる節の連続に見えるが、節が述語人称を欠くなどによって表現される可能性がある。